

神社・祭礼・芸能を活用した津波被災地の復興の可能性と課題

—岩手県大槌町における郷土芸能の観光活用の事例から—

地域変動と住民生活分野 石 良

【研究背景と目的】

郷土芸能は日本の伝統的な文化として地域に根付き、継承されてきた。一方、地域における郷土芸能は後継者の不足や新型コロナウイルスの感染拡大により、厳しい状況に直面している。東日本大震災の被災地である岩手県沿岸地域は震災から10年目を迎え、復興が進みつつあるが、地域の郷土芸能は復興に対してどのような役割を果たしてきたのだろうか。本研究では、現地調査を踏まえて、神社・祭礼・芸能を活用した津波被災地の復興の可能性と課題を考察する。特に、郷土芸能の観光活用の事例に着目する。

震災前は、民俗芸能の存続についての研究（澁谷美紀（2006）、大石泰夫（2007）、足立重和（2010）など）が多くみられた。しかし、民俗芸能が地域社会の存続に与える影響についての研究は少なかった。その後、東日本大震災の津波により、郷土芸能の実演に欠かせない道具や衣装や倉庫などが流されたにもかかわらず、幾つかの地域では祭礼を引き続き行うことで、地域の復興に寄与した事例に関する研究が注目された（植田今日子（2013）、懸田弘訓（2018）、橋本裕之（2016b）など）。一見すると生活の復興に結び付かないように見える郷土芸能・祭りがなぜ他の必要性が高い活動より早く行われたのだろうか。本研究ではまず伝統芸能・祭りを神事の視点から考察し、次いで、郷土芸能が復興に果たす役割について研究する。

岩手県沿岸地域の郷土芸能はこれまで無形民俗文化財として保存されてきたというよりも、むしろ地域社会に暮らす人々に楽しみや喜びを与える芸能として享受されてきた。さらに、岩手県沿岸地域の郷土芸能は地域社会がまとまりのあるコ

ミュニティとして成立するために欠かせない精神的な支柱であり、そこで生きる人々にとって気高いものとして存在してきた。そうした状況を背景にして、地域住民は被災後に郷土芸能を継続してきた。

ところが、2020年からの新型コロナウイルスの感染禍により、大災害の非常事態下でも遂行されていた祭りは、感染拡大を防ぐために、中止されたり、延期されたり、規模が縮小された。それに伴い、郷土芸能を披露する機会も大幅に減少した。東京文化財研究所によると、新型コロナウイルスの影響で2020年12月13日までに中止や延期となった伝統芸能の公演の件数は4300件余りに上り、損失額は推計で170億円以上に及ぶことが明らかになった。このほか、公演の中止や延期によって衣装や楽器などの需要が落ち込み、廃業に追い込まれる企業も出るなど、伝統芸能を支える裏方の現場にも深刻な影響が及んでいる。

本研究は、岩手県大槌町の被災後の郷土芸能の活動状況、団体間の関係、震災10年後の課題、および観光化に対しての各団体の代表者の意識、動機、目的を調査し、大槌町における郷土芸能が有している神事との強いつながりと、被災地域での郷土芸能による復興と観光振興の可能性と課題を明らかにする。

【対象と方法】

本研究は、東日本大震災の津波により大規模被害を受けた岩手県大槌町における郷土芸能団体を対象とした。大槌町の最大の神事・祭礼である「大槌まつり」は、1980年から小槌神社と大槌稻荷神社との合同の祭りの形で行われてきた。そして、東日本大震災という非常事態の後も、規模を縮小

しつづも継続してきた。2020年には新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、(大槌まつりの神事は中止されたが、地域の郷土芸能団体は告知なしに郷土芸能の「自主公演」を行った)。さらに、2021年4月から9月の間に、小槌神社の境内で「三陸大槌町郷土芸能かがり火の舞」という観光イベントを実施した。大槌町の郷土芸能団体はなぜこのような困難の時期でも、引き続き芸能を披露したのか、また、震災後も活躍してきた郷土芸能団体は現在どのような課題に直面しているのかを明らかにし、大槌町における郷土芸能が継続している原因を探究し、沿岸被災地域における郷土芸能の意義を考察する。

研究方法としては、「三陸大槌町郷土芸能かがり火の舞」に出演した郷土芸能団体とイベントを支えている関連組織に定性的な聞き取り調査を実施した。そのほか、2021年6月の「岩手大槌サモン祭り」、同年7月の「令和3年度郷土芸能祭」、同年11月の「おおつちまるごと復活まつり」を現場で見学した。更に、郷土芸能に関連する組織として大槌町観光交流協会と大槌町役場および、大槌町教委委員会に対して聞き取り調査した。また、大槌町文化遺産活性化実行委員会が発行した資料、大槌町観光交流協会と各団体提供の資料・データ、新聞記事などの文献資料を利用した。

【考察】

- ① 震災前および震災後大槌町の郷土芸能団体と住民は神事(祭礼・宵宮)を重要視、それに関連する地域交流(お花・門打ち)を重要な行為として認識していた。
- ② 東日本大震災により、大槌町の郷土芸能団体は甚大な被害を受けた、団体会員の死亡、転居による会員数の減少、実演必要な道具や衣装の流失、練習場所や倉庫などの破損などにより、活動の継続が困難になる事態を経験した。
- ③ 震災直後には、犠牲者の鎮魂や被災者の支援のために、芸能を披露する例が見られた。また、震災の年に開催された大槌まつりにも出演した。
- ④ 震災後に、復興支援で世話になった自治体や団体に対して、現地に出向いて感謝の意を表

すために郷土芸能を披露する機会が増えた。

- ⑤ 震災復興として大槌町では復興イベント・文化イベント・観光イベントが始まり、各芸能団体はそれらのイベントに出演することによって、出演者のモチベーションが向上した。
- ⑥ 「三陸大槌町郷土芸能かがり火の舞」に郷土芸能団体が参加することで、観光客数の増加や観光収入の増加に貢献し、地域の再生が進んだ。
- ⑦ 大槌町の郷土芸能団体に所属している子どもたちの一部はその後、別の郷土団体に所属を変更する事例が見られた。特に、近年は、「虎舞」に所属を変更する事例が多い。
- ⑧ 大槌町郷土芸能の団体の責任者のリーダーシップが団体に重要な役割を果たしていた。そのため、責任者のリーダーシップの強弱が郷土芸能の存続や発展に影響を及ぼしていた。
- ⑨ 大槌町の郷土芸能の伝承方法は「下から上へ」という特徴を持っていた。地域住民が主体的に活動し、それを行政や支援団体が支えるという特徴がみられた。

【結論】

大槌町では、郷土芸能を観光資源として活用することで、地域の復興を進めている。神事としての芸能の存続が重要であるが、神事以外の文化イベントや観光イベントで郷土芸能を披露することもおおむね容認されている。このことから、郷土芸能団体が郷土芸能を継続する場合、「出番」(出演機会)の増加が重要である。出番があるからこそ、練習が必要となり、練習によって、団体会員同士の交流や団体間の交流が実現する。交流があるからこそ、人びとと地域のつながりが生まれてくる。それゆえに、観光イベントでも、文化イベントでも、「とりあえずやべ!」(とにかくはじめよう)という結果がもたらされる。

東日本大震災による被災という非常事態を経て、大槌町の郷土芸能団体の担い手および関係者は今まで郷土芸能を行ってきた意義を再認識し、郷土芸能を引き続き行うという意識がより強くなったと言える。